

「縁・えにし」のよろこび

～永代経法要（4月27～29日）～

ご講師は、宏林晃信師（兵庫・浄元寺）。布教使の僧侶を養成する伝道院にて、指導講師をされています。また、本願寺web放送「お坊さんがゆく！」のレポーターでもご活躍です。笑いあり、涙ありの尊いお取り次ぎでした。



～秋季彼岸会（9月13～15日）～

ご講師は、吉村隆真師（熊本・良覚寺）。“現代布教”というスタイルを確立し、全国的に活躍されています。心に響く、あたたかいご法話でした。



～秋の仏教婦人会法座（10月23日）～

ご講師は、松月英淳師（糸島市・海徳寺）。福岡教区・若手布教使の会長として活躍されています。阿弥陀さま、お慈悲いっぱいのお取り次ぎでした。



ナモ（南無）net



真教寺・仏教壮年会

～いよいよ本格的にスタートします。～
興味がある男性の方は、本堂の配布物コーナーに入会申込書を置いてあります。あなたのご参加が、朋友(ほうゆう)の輪となります。どうぞお待ちしております！

＜活動内容＞
例会・懇親会
お寺活動に参画・サポート

『お寺の活動に男（あなた）の力を！』

除夜の鐘（12月31日 午後11時45分～）

引き続き元旦会（2018年1月1日午前0時～）

お勤め、法話
※好評の紅白餅（新年メッセージ入り）を配布します。
お待ちしております。

～そうだ！年末年始はお寺にいこう！～



那珂組でも、仏教壮年会主催で門信徒講座（公開講座）を開催中です。どなたでもご参加できます。詳しくは、本堂配布物コーナーにチラシを置いてあります。ちなみに場所は、真教寺です



阿弥陀さまからのお手紙

「やよなら」のない出会い

松月博宣（糸島市 海徳寺）

元旦、たくさんの方と年賀状の交換をいたします。中には年に一度、年賀状のみでのお付き合いという方もありますが、それでも一枚一枚に、くださった方の近況を知り、お互いの無事を確認し合うことができてうれしいものです。最近流行の携帯メールでは味わえない温もりを感じることができません。今年もまた新たなたくさんの方との出会いがあることでしよう。

さて、人生は人との出会い、そして別れの繰り返しいといえます。人間が一生の間に出会う人の数は、何らかの接点を持つ人が一万人。そのうち同じ学校、同じ職場、近所という近い関係が一千人。さらにそのうち親しく会話をもちのが百人。友人と呼べるのが三十人。親友と呼べるのが三人。という数字を何かの本で読んだ記憶があります。これは当然個人差がありましようが、興味ある数値ではあります。年賀状を交換する方々は、右の数字の一千人中のいかほどでしょうか。そのうち親しく会話を持つ人を仮に百人として、その中で「本当に出会えた」といえる人は一体何人になるでしょう。

「本当の出会い」というのが、嘘の出会いがあるのか？とお叱りを受けるかもしれません、一昨年相次いで先立たれた先輩方との別れを通じて、実に温もりのある「別れ方」があるものだという経験を体験しました。その経験を通して、私たちはともすれば「さよなら」をする出会いになってしまっているのではないかと思わずにはいられなかったのです。

「会うのは別れの始め」という言葉があるように、私たちは死ということをはじめ、必ず別れを経験しなければなりません。しかし、同じ別れでも「さよ

なら」ではなく「またお会いできますね」、あるいは「お待ちしております」という別れも確かに存在するのです。

私の先輩で五十五歳のUさんは一昨年の十一月八日、膝臓がんでお亡くなりになりました。その前夜、病床を見舞うことができ、これが最後とお互いわかっておりますから、実に濃密な時間を過ごすことになりました。病室を辞す時、今までのご交情にお礼を申しました私にUさんは握手を求められ、「君、身体を大切にね。また会って話したいね。でも、もう無理だろうなあ……でも、また会えるもんね」と、もうこれ以上ながらえない、と自らの病状をそのまま受け容れた落ち着いた声でおっしゃいます。Uさんの心が痛いほど感じられ「はい」と返事をするのがやっとの私でした。

病室を出て行く私の後ろで「ナマンダブ、ナマンダブ」とUさんのお称名(しようみよう)が聞こえます。私も呼応するがごとく「ナマンダブ、ナマンダブ」とお称名申すばかりでした。それから5時間後の深夜、ご家族に看護られながらお浄土にお参りになったのでした。

その時の「また会えるもんね」のUさんの声の響きとお顔を、いまだに忘れることができません。すでにながらえることができなことを知っておられたUさんは、生前、坊守さんに「おまえはおぼあちやんになつて参つておいで、それでも待つてるからね」と語っておられたと、お悔やみに参上したとき泣き笑いの中でお聞かせいただきました。

私への言葉、そして坊守さんへの言葉を合わせ聞き、「さよなら」という言葉がないお別れの仕方もあるのだなあ、これこそが「本当の出会い」なんだなあ、と改めて教えられたUさんとの「別れ」でした。これは「人間死んだらおしまい」「死は嫌なこと」「死は敗北」などと考えるところには決して味わえない、温もりのある「別れ」であり「出会い」であると言わなければならない。このような出会いは過去・現在・

未来を貫く永遠のいのちの場であるお浄土をいただくことができた時、初めて醸(かも)し出されるもののようにです。

親鸞聖人、八十七歳の聞(うるう)十月二十九日付の高田の入道(にゅうどう)に送られた書状の中に、『かくねんぼうの仰(おおせ)られて候(そうら)ふやう、すこしも愚老(ぐろう)にかはらずおはしまし候(そうら)へば、かならずかならず(ひと)つどころ(ま)ありあふべく候(そうら)ふ。』と記され、また、『入道殿(にゅうどうどの)の御(おん)こころも、すこしもかはらせたまはず候(そうら)へば、さきだちまゐらせても、まぢまゐらせ候(そうら)ふべし。』

と、先だつた門弟の死に際し、「私のご信心と少しも変わるものではありませんから、私どもと必ず一つ浄土へ参ることでありましよう」あるいは、「入道殿、あなたのご信心も少しも異なるものではありませんから、私が先立ちましたも、お浄土でお待ちしていきましょう」と申される中に、「さよなら」という意味合いの言葉をお使いになっておられないことに注目してみたいのです。

阿弥陀さまの「わたしが仏になるとき、すべての人々が心から信じて、わたしの国(浄土)に生れたいと願い、わずか十回でも念仏して、もし生れることができないうなら、わたしは決してさとりを開きません」という願いを聞き、受け容れることができた時、同時に開かれるのが過去・現在・未来を貫く永遠の出会いの場であるお浄土でありましよう。

家族・知友との、このたびの出会いを、法(のり)の朋(とも)として「さよなら」のない真実の出会いといたしたいものです。

※この法話を書かれた松月先生は、今年の報恩講のご講師でした。

『「やわらか法話1」(本願寺出版社)より』

